

高機能バルブを開発

フィルタベント系に設置

平田バルブ工業 各原子力発電所に採用へ

平田バルブ工業は、原子力発電所の過酷事故時に機能するフィルタベント系に設置される高機能バルブを開発し、各発電所に供給する体制を整備したと発表した。

同社では、国内BWR向けのバルブ供給を始めるよう、従来型バルブをベースに、機能、構造、使用材料等の改良を加

え、流量特性も従来型と同等となる「メタルシート型高機能バタフライバルブ」の新規開発を行い、確認試験を経て、実機供給に目途をつけた。

既に、同バルブは、再稼働を目指すプラントへの採用も決まっており、同社では、さらなる受注に向けて、PR活動を積極的に展開する方針。

小型FPD搭載の血管撮影装置

島津製作所が発売

島津製作所は、20日、8インチ角サイズフラットパネルディテクタ(FPD)を搭載した、血管撮影システム「Trinias (トリニアス)」シリーズの新製品として、天井走行式と床置き式、パイプラインタイプの三つ



の機種を発売した。患者のQOL(生活の質)に対する意識の高まりなどを背景に、患者に優しい治療法として、X線透視撮影を行いながら、太ももの付け根や手首の皮膚にあけた穴からカテーテル(医療用細管)を血管に挿入して行う血管内治療(インターベンション)の件数が年々増加している。血管撮影装置の使用用途の約半分が心血管治療・検査であるため、心血管センター、循環器センターなどに代表される心血管疾患を専門に先進治療を行う現場から、取り回しが容易で心臓部に密着させることができる小型FPD搭載の装置が求められていた。今回これに対応した新機種の開発・販売となった。(写真はF8 package(床置き型)まで)

福島第一原子力発電所の事故以降、とくに身の回りの放射線に対する国民の関心は高く、生活上の判断材料ともなっている。それに伴い、リスクコミュニケーションを担う人材の重要性は質・量とも増している。そこで放射線医学総合研究所(放医研)の神田玲子氏に、これまでの経験を踏まえて課題などをうかがった。

「事故直後は、放射線のことがかたやわわって、くちくちとした説明で納得して頂けることが多かったのですが、それは一、二か月のこと。多くの情報が出回り、日常生活の判断をするために質問する方が増えるにつれて、説明する側も試行錯誤の繰り返しでした」

「何を信じていいのか」という情報リテラシーの問題やリスクという確率に

信頼関係を基本に 地域の人材育成にも注力

リスクコミュニケーション



神田玲子氏

放射線医学総合研究所 放射線防護研究センター 上席研究員

科学的に正しい理解を促進する役割があるとの基本認識のもと、困難な課題に向き合い続ける。「専門家への信頼」という問題が取り沙汰され、「どう伝えるか」にスポットがあつた時期もありましたが、放射線リスクの場合同様に重要なのは「何を伝えるか」です」

「何を伝えるか」は、双方方向に意見交換する

「秋の大会」八戸工大で来月3日から日本原子力学会

日本原子力学会は九月三〜五日、八戸工業大学(青森・八戸市)で、「秋の大会」を開催する。応募発表の他、一般市民向けの無料公開セッションも予定。また、福島原子力発電所関連では、事故調査の最終報告について、委員長の中田知氏(東京大学教授)が説明する(四日)。詳細は、学会HP (<http://www.aon.or.jp>)、または年回大会担当係(電話03-3508-1261)まで。

「同じ地域に住んで、同じものを食べている地元人間が説明することは信頼されやすい、いろんな立場の人たちが連携していくことが大切」と考えてのことだ。

事故時の放射線情報のように、不確実性を伴う情報は、安心より不安拡大を助長することが多い。知識が増えるほど危険認知度が高くなるのも現実だ。だからこそ平時から時間をかけて信頼関係を構築する必要がある。各地域に根差した多様な人材を育て、うまく連携していくことが重要となる。放射線医学の専門家集団として放医研に期待される役割は大きいだけに、「今からがじっくり構えて長期戦です」と話す。

「何を信じていいのか」という情報リテラシーの問題やリスクという確率に



Leading Supplier of Nuclear Fuel Cycle Goods and Services



株式会社テネックス・ジャパン
TENEX-JAPAN Co.,

東京都港区虎の門5丁目11番2号 オランダヒルズ森タワー14F
(Tel):03-5776-1511 (Fax):03-5776-1512 (E-mail):info@tenex.co.jp